

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370334

研究課題名(和文) 強制収容所で過ごし、解放後社会主義に傾倒した日系アメリカ作家、および芸術家の軌跡

研究課題名(英文) The tracks of the Japanese American writers and artists who spent their adolescence in the internment camps and were devoted to socialism in the 1970s.

研究代表者

牧野 理英 (MAKINO, Rie)

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：10459852

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、第二次大戦中、日系強制収容所で青少年期を過ごし、解放後に社会主義に傾倒していった日系アメリカ人の作家、および芸術家の軌跡をたどること、彼らの歴史的経験がどのように作品に投射されたかを探るというものである。

本研究における成果は、2014年度から2016年度にかけて、論文6件(和文3件、英文3件)、発表10件(日本語5件、英語5件)である。特に2015年6月に慶応大学で開催された国際メルヴィル学会では、日系アメリカ作家とメルヴィルの新しい接点を発見することでアメリカ文学に一石を投じることができたといえる。

研究成果の概要(英文)： This study focuses on the Japanese American writers and artists who spent their adolescence in the internment camps during WWII and were devoted to socialism in the 1970s. The result was that I published 6 articles (three Japanese and three, English), and gave 10 presentations (five Japanese and five English). Especially, I achieved great results from the International Melville Conference in 2015.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：日系アメリカ作家 強制収容所 社会主義 第二次世界大戦

1. 研究開始当初の背景

今日のアメリカ文学史における日系アメリカ研究の学術的背景はいまだ浅い。これはアメリカ、日本両国の研究者の日系アメリカ史 特に第二次大戦の日本の敗北と日系の強制収容所 に対する関心の薄さ、そして情報の少なさなどが一因といえる。戦後の40年代後半から50年初頭にかけて、アメリカ政府側だけでなく日系集団内でも収容所の歴史が語られることがなかった事実は、「集団的記憶喪失状態」とさえも言われていた。このように日系側とアメリカ国家側両方から隠蔽された歴史的史実をもつ日系アメリカ文学は、迫害の歴史とプロテストを根幹にするアメリカエスニック文学とは袂を分かつものである。

60年代以降から日系収容所に関する研究は活発に行われ、次第に収容所の内情が社会に公開されつつあったが、収容者の芸術活動に焦点をあてたものはいまだに数を数えるほどである。確かに2012年から2013年にかけて日本において行われた東京芸術大学、NHK主催の「尊厳の芸術 “The Art of Gaman”」が大成功をおさめた。しかし牧野はこうした一般向けの展示の必要性を尊重すると同時に、このような展示会には紹介されていないタイプの作家、芸術家に着目することで、新たな日系アメリカ文学、芸術の軌跡を提示しようと思いつに至ったのである。具体的には、迫害の歴史(収容所)に対する直接的なプロテストではなく、そうしたトラウマを社会主義的思想に介在させ、作品に投射した日系集団に着目するということである。

本研究は2006年にアメリカ合衆国アリゾナ州立大学大学院英文学科に牧野が提出した博士論文のテーマとなった日系アメリカ作家カレン・テイ・ヤマシタの作品分析を発端とする。

ヤマシタの、日系収容所という歴史に直接的に触れないナラティブは、単に作家自身がそれを経験していない(ヤマシタの母親は収容者であったが、彼女自身は終戦後に生まれている)という事実に帰依するものではなく、アメリカ国家からの抑圧や迫害に対するプロテストをその民族的アイデンティティーの核にしないという姿勢に起因していた。

その後牧野はアメリカ本土における日系集団に興味を持ち始め、日系アメリカ作家ヒサエ・ヤマモト、ワカコ・ヤマウチの50年代における作品分析を行った。ここで発

見したことは、ヤマモト、ヤマウチは解放後、社会主義的共同体に属し、執筆活動を続けていたという事実である。このことより、牧野は収容所のトラウマを単純にアメリカ国家政策の誤りとして自己の内面に氷結させるのではなく、自律的自我を形成する要素として再導入する行為と考えるようになった。

ヤマモト、ヤマウチ両者から影響を受けた日系アメリカ作家、カレン・テイ・ヤマシタの作品にもこのような思想は継承されている。『I Hotel』において、ヤマシタはアメリカ本土のカリフォルニア州を舞台にし、40年代に収容所を経験した日系の登場人物が、70年代社会主義活動家へと転身し、アメリカと日本との間を行き来する様子を描いている。登場人物の収容所の記憶は極めて表層的に触れられているが、70年代の社会主義的運動と結びつくことで、登場人物の自我形成をなすものとなっている。ヤマシタは社会主義に傾倒していく日系アメリカ人のキャラクターすべてを肯定しているわけではないが、こうした経緯から牧野は収容所と社会主義的思想との連関性を分析しようと思いついたのである。

研究開始の時点で明らかになっていたことは、ヤマシタの最新作『I Hotel』における、70年代社会主義の活動家で同時に舞台役者である日系アメリカ人のキャラクター、アーサー・ハマとその妻エステルにはモデルがいたということであった。牧野は2013年9月のロサンゼルスでのヒラサキ・ナショナルセンターの訪問において、そのことを発見している。モデルとなったのは、アーサーとエステル・イシゴという実在の人物である。白人の妻エステルは、異人種間結婚がアメリカ社会で受け入れられていない20年代にアーサーとメキシコで結婚し、その後の第二次大戦開戦後は夫と一緒にいるために、ワイオミング州のハートマウンテンの収容所へ入ったという異色の背景をもつ水彩画家である。エステルは夫の死後も社会主義的な芸術家として活動していたが、役者であったアーサーの芸術活動、および社会活動に関しては、前述したヤマシタの小説、*I Hotel* とエステルの自叙伝 *Lone Heart Mountain* から推察する以外何も知られていないのが現状であった。エステルは日系アメリカ人の芸術家の軌跡を記録したわずかな白人であるといえるが、あくまでもこれらの記録は白人という人種の視点であることに変わりはなく、アーサー側からの文献や手記に注目する必要

性を感じた。

アーサーの手紙や書簡はUCLAのCharles E. Young Research Libraryのスペシャルコレクションにあるため、そこにある文書を読覧し、分析することによってこの人物像にせまった。

一方『Hotel』における日系登場人物、アーサー・ハマが日本との接点をつねに絶やさずにいる描写などから、日系作家ヤマシタは祖国である資本主義国家アメリカを批判し、それに対抗できうる社会（共産）主義的空間を彼女のもう一つの祖国ともいえる70年代日本に見ていたと思わせるふしがある。事実ヤマシタの処女作である「風呂」という短編は、若き日系アメリカ人の女主人公が1972年に日本の軽井沢を訪れるという内容であるが、その時日本赤軍による「浅間山荘事件」が起こり、テレビの実況中継に見入るといったシーンが挿入されている。この短編には日系主人公の、日本赤軍の若者に対する共感とともに、それと複雑に絡み合う一種の嫌悪感などが綴られている。

以上のように本研究では、社会主義と日系収容所がどのように連関するのかという問いをベースにしている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第二次大戦中、日系強制収容所で青少年期を過ごし、解放後に社会主義に傾倒していった日系アメリカ人の作家、および芸術家の軌跡をたどることで、彼らの歴史的経験がどのように作品に投射されたかを探るといったものである。

本研究は、アメリカのエスニック文学の領域でも、日系アメリカ作家、芸術家に焦点を当て、その収容所という集団的記憶がどのように作品に投射されているかを分析することに主眼が置かれている。

本研究の独創的視点とは、本研究が対象とする日系作家および芸術家が、アメリカの国家的政策を批判する戦略を、70年代日本の社会主義的発想の中に見出しているのではないかという牧野の仮説にある。収容所の生活とは、閉塞した空間で、すべてを平等に分割する共同社会であり、日本の家長の権威は失墜し、伝統的な家族の概念が喪失していく事態は回避できなかった。そしてその経験は、非国民として生きることを強いられた日系アメリカ人のトラウマであることは紛れもない事実である。しかし同時に若い世代に収容された日系にとって、

この経験は、解放後の彼らの反アメリカ資本主義、反アメリカ帝国主義的発想の根幹となってもいる。

特にヤマシタのケースでは、70年代の日本の社会（共産）主義運動にも着目していることなどから、本研究は単なるアメリカにおける日系アメリカ研究にはとどまらない、トランスナショナルな視点を日本人研究者の主体的位置から発信していることになる。確かに現存するアメリカ文学史をひも解いてみると、アメリカ資本主義を批判する視点を他国に求め、国外離脱者となった作家のケースは多々存在する。しかしながら、そうした視点を日本の社会（共産）主義的運動に求めたという例はいまだ十分に研究されていない。

以上のように本研究の目的、そして意義は、アメリカ資本主義を批判する立場を日本に見出し、新たな日本像を日系アメリカ作家が提示している事実を論証することにあつた。このことにより、今までアメリカ文学史上におけるキャノンの集団から離脱されているととらえられていた日系アメリカ文学の重要性が注目され、アメリカのみならず、日本においても日系アメリカ文学が研究、教授される意義があることはいままでもない。

3. 研究の方法

本研究は大きく3段階に分けられた。収容所内に残された文献を読覧、解読、および体験者の親族とのインタビューによる取材を行い、収容所内および解放後に作成された芸術作品、および文学作品から社会主義的傾向を分析する。そして収容所の体験と社会主義的発想との連関（特に70年代日本との関係）を見つけ、この歴史的トラウマがどのように芸術的表現へと昇華していったかを日本人研究者の立場から分析・提示し、現在のアメリカ文学研究に一石を投じるというものである。

このことに加え、本研究は二つの作業に分かれる。アメリカ本土にある日系収容所に保管されていた手紙や書簡、そして本研究該当の日系アメリカ作家や芸術家（ここではカレン・ヤマシタ、イシゴ夫妻の遺族）とのインタビューをする段階、次にそれらの資料を基に、社会主義的要素がどのように介在されているのかを、作品にあたって分析するという作業段階である。ここでは70年代日本における日本赤軍事件などの資料を日本、およびアメリカで収集する作業も含まれた。

そして本研究の最終目標とは、3年目の

29年に研究書『日系性とそのトランスナショナルな転換 強制収容所と社会主義をめぐって』(仮題)の下書きを書き終え、出版準備を整えるということであった。

アメリカ西南部(カリフォルニア州)における資料収集、およびインタビューに基づく海外出張に関しては、平成26年の夏休み(7月から9月)を全般的に使った。当時日本大学本部の海外研究員短期B(一か月)の助成金を受けていたため、これをここで使用。またこの時期、『Hotel』の作者で現カリフォルニア大学サンタクルス校の文学部創作学教授であり作家でもあるカレン・テイ・ヤマシタに面会し、作品の背景などに関するインタビューを行うことができた。ヤマシタは牧野がアリゾナ州立大学英文学大学院時代からの知己であり、処女作「風呂」を牧野が翻訳する件でも十分な理解を示した。また強制収容所の経験をもつ彼女の母、アサコ・ヤマシタ氏とインタビューをした。ヤマシタ両氏には過去5年において面会済みであり、インタビューの了解を得ていた。

またイシゴ夫妻はハートマウンテン収容所の前に、カリフォルニア州、ポモナ収容所(現在はLos Angeles County Fairgroundsでありこの場所には研究所は存在しない)に短期間収容されていたことなどから、この収容所に関する文献をロサンゼルス日系博物館、ヒラサキ・ナショナル・リソースセンターで収集した。それ以外の資料に関しては、カリフォルニア大学ロサンゼルス校、サンフランシスコ州立大などの図書館にあたった。

慶応義塾大学の巽孝之氏編集のもと、ヤマシタの作品全般に関するアジア研究者ベースの英語の研究書が30年に出版予定であり、プロスペクタスはすでに提出済みである。

27年度はワイオミング州ハートマウンテン収容所に関する資料を集めることに専念した。ここではイシゴ夫妻に関する資料を集めることに主眼をおいていた。水彩画家で、*Lone Heart Mountain* といった手記や *Days of Waiting* といったドキュメンタリー映画などで有名になっているエステルに比べ、夫アーサーに関する資料の少なさが目立つ。したがって、ワイオミング州、レイルトンにあるハートマウンテン・インタープレティブセンター(旧ハートマウンテン収容所)と連絡をとり、文献のPDFなどを送ってもらった。このセンターへ直接赴くことがなかったのは、必要としていた図書館内の文書がほとんど

PDFやマイクロフィッシュになっていたためである。またこの研究所を直接訪れることがなかった事実に関しては、研究の進み具合からどうしても冬季になってしまう旨を所長に相談したところ、飛行機などの交通手段がきわめて乏しく、事故等なども予想されるという忠告を受け、実際に赴くのは賢明でないと牧野が判断したためである。

またアーサーの収容所解放後の活動に関しては、資料がほとんど皆無であるため、作家のカレン・ヤマシタやイシゴ夫妻を知る人物らにインタビューをすることで、その人物像に迫った。

研究最終年度になる平成28年度は博士論文と本研究の集大成である『日系性とそのトランスナショナルな転換 強制収容所と社会主義をめぐって』の原稿を完成することに努めたのであるが、実際にはなかなか結論部が安定したものにしあがらなかった。これは研究機関中に様々な学会から依頼発表、原稿の申し出があり、それらの大半は日系のみを扱うものではなく、学際的で、インターエスニックなテーマが多かったことに帰依する。こうした横断的に広がっていく研究分野により、下書きは何度も書き直さねばならず、また結論部の大幅な修正が要求され、現在のところまだ未完の状況である。

アメリカでの日系作家、芸術家、研究者(ワイオミング州)との面会が26年(7-9月)となっているが、これが全員計画通りにいかなかったため27年の夏休み(7-9月)のカリフォルニア州の人々との面会に集中させた。

4. 研究成果

受託当初における本研究の目的としては、英語論文を2本、日本語での論文を1本、さらに29年の終わりには博士論文を基盤にし、本研究を推し進めた研究書、『日系性- そのトランスナショナルな転換：強制収容所と社会主義を巡って』(仮題)の原稿を完成させる予定であった。

しかし実際に研究最終の29年度になると、さまざまな形で依頼原稿を執筆することになり、日系作家と他の作家との関連性なども発見され、予定を大幅に超えた成果をあげることができた。一方このことと並行して、研究書の原稿は大幅に書き換えなくてはならなかったため、今後は原稿の書き換えに多少の時間を要すると思われる。

本研究では論文6件(和文3件、英文3件)を出版した。また研究発表は10件(日

本語 5 件、英語 5 件) である。以下において主だったもののみを掲載させていただく。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

牧野理英, 「不在の存在と日本、そして北米先住民」, 『三田文学』, 2016 年, 124 巻 95 号, 査読なし, 163 - 168.

Rie Makino, “Between Ishmael and Tashtego.”, 査読あり, *Leviathan: A Journal of Melville Studies* 18.1, 2016 年, 80-83.

牧野理英, 「Juliet Kono の *Anshu* に見る情動」, 査読なし, *エコクリティシズム・レビュー* 9 号, 2016 年, 91-96.

牧野理英, 「70 年代の Yamashita とそのポストモダニズム 日系収容を中心に」, 査読なし, *AALA Journal* 22 号, 2016 年, 9-16.

Rie Makino, “Absent Presence as a Non-Protest Narrative: Internment, Interethnicity, and Christianity in Hisaye Yamamoto's "The Eskimo Connection.”, 査読あり, *JAAS: The Japanese Journal of American Studies* 26 号 2016 年, 76-99.

Rie Makino, “The Transnational Body and Grief: Comments on Professor Stephen Sumida's 'Acts of War, Arts of Peace.'” 査読なし, *AALA Journal: Asian American Literature Association* 20 号, 2014 年, 23 - 27 .

[学会発表](計 10 件)

牧野理英, 「抵抗言説としての障害と捕囚のナラティブ: 心身障害からみるアメリカ文」, 日本英文学会関東支部第 13 回大会 (2016 年 秋期大会), 2016 年 11 月 12 日, フェリス女学院(神奈川県・横浜市)

牧野理英, 「Yamashita と 70 年代 Karen Tei Yamashita のポストモダニズム」, AALA forum (アジア系アメリカ文学研究会 記念フォーラム), 2016 年 9 月 24 日, 神戸大学 (兵庫県・神戸市)

Rie Makino, “Comments on Scott Slovic's “Ecocriticism and the Psychology of Information Processing.”,

SES-J/ MESA (多民族・エコクリティシズム研究会合同年次大会), 2016 年 8 月 6 日, 大東文化大学 (東京都・板橋区)

Rie Makino, “The Transnational Bodies and American South: Wakako Yamauchi's Short Story.”, ALA (American Literature Association) 2016 年 2 月 23 日, San Antonio, Texas (The United States)

Rie Makino, “The Multiple Racial Subjects of Japanese Immigrants: Brazil-Marun and Diversity Training in Japan.”, MLA (Modern Language Association), 2016 年 1 月 5 日, Philadelphia (The United States)

牧野理英, 「日系アメリカ人文学と原爆 Juliet Kono の *Anshu* をめぐって」, エコクリティシズム研究会 年次大会, 2015 年 8 月 6 日, 広島市立大学(広島県・広島市)

Rie Makino, “Responses to Karen Tei Yamashita's "Call Me Ishimaru.”, 11th International Melville Conference, 2015 年 6 月 27 日, 慶応義塾大学(東京都・港区)

Rie Makino, “Discussant: Stephen Sumida's "Acts of War, Arts of Peace.”, AALA, 2014 年 9 月 24 日, 京都外国語大学 (京都府・京都市)

牧野理英, 「鳥、俳句、ネイティブ」, 慶応義塾大学 G-SEC アメリカ研究プロジェクト, 2014 年 7 月 18 日, 慶応義塾大学 (東京都・港区)

牧野理英, 「収容所の記憶と 70 年代の日系アメリカ カレン・テイ・ヤマシタの Hotel におけるアメリカ資本主義へのトランスナショナルな批判的見地をめぐって」, 第 48 回アメリカ学会年次大会, 2014 年 6 月 7 日, 琉球大学 (沖縄県・中頭郡)

[図書](計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

牧野 理英 (MAKINO, Rie)

日本大学・商学部・准教授

研究者番号：10459852